

ギターと私(9)－効果的な練習法

前回で右手の使い方について書いたが、その他、自分の上達に役立ったことを思い出すままに記したい。他の方の参考になればよいのだが。

コンクール入賞を一つの節目と考えると、入賞以前のことで印象に残っているのは、ある公園のベンチで、「魔笛の主題による変奏曲 Op.9」(ソル)を通して弾いたことである。たどたどしくても最初から最後まで弾き通せたことで、その曲に対する見通しが立ったことが、自分にとっては大きな経験だった。つまり、「当たりがついた」とでも言おうか、このまま練習していけば、遠からずその曲は弾けるようになるという確信が持てたということだ。

ちなみに、ギターを教える立場になって気になることの一つに「弾き直し」がある。曲を弾き始めて2、3小節経つと、大したミスもしていないのに止め、最初から弾き直す生徒が結構いる。小さなミスで一々弾きなおす癖は、確実に上達を妨げる。曲全体が通せるようになったら、小さなミスにこだわらず1曲を通して練習すべきである。特に大曲に取り組む時はそうであり、全体を見通す目と指の力は、部分だけを練習していても培われるものではない。なお、その際にミスが多発する部分は、その原因を考えることも重要である。その際に、左指の運指にばかり気をとられないで、右手の使い方にも注意を払うべきである。

また、うまく弾けない部分は、テンポを半分ぐらいに落として練習することが重要である。このことは、たいていの先生が口にする常套句であるが、やはり真実である。細部の音が曖昧になってしまうことを避けるためにも、一音一音を確かめるつもりでゆっくり練習するとよい。その際、メロディーを歌いながら練習するのもよい方法である。

さらに、自分なりの表現を考えることは、さらに重要である。それには、強弱記号、クレッシェンド、ディクレッシェンド、表情記号等、楽譜に書いていることをきちんと読みとることから始めなければならない。その際に、最低限の楽典知識があるとさらによいが、その曲の魅力を考え、その魅力を表現するにはどうすればよいかを考えることから始めればよいのではないだろうか。音量の大小、音質の硬軟だけでも組み合わせれば4通りの弾き方が生まれる。そういうことを考えることからその人の表現が生まれてくる。

それは、おめかしして出かけるときに、何を着るかを考えることと同じである。上下に着るものやその色の組み合わせ、さらには帽子等の装飾品に至るまで、いかにおしゃれするかを考えることなら、ほとんどの人がやっていることである。おしゃれはTPOが大切だと言われるが、音楽も曲想によって表現が変わってくる。経験はないが、化粧も同じ理屈ではないだろうか？

最後に、人前で弾く機会があれば、積極的に弾くことが大切である。これについては、最近の生徒は考え方が変わってきているようで、人前で弾くことを嫌がる人が増えてきたようだ。ここで持論を展開するつもりはないが、失敗さえできない人に成功(人を感動させる演奏をすること)はあり得ない。また、「徒然草」の第150段を読んでいただきたい。その内容のさわりを記せば、「芸能を習得しようとする人は、未熟な時から上手の人の中に混じり、悪口を言われ、笑われても恥ずかしく思わず、平気で押しとおして熱心に習わなければならず、そうして年を重ねていく中から名人が出てくる。」というものである。すべてを読んでも3分もあれば読み通せる分量なので、ぜひ目を通していただきたい。本を買うまでもないので、次のアドレスをごらんいただきたい。

<https://tsurezuregusa.com/150dan/>

(2020.5.4 記)